

# 白血病 電気で診断

## 北九州の研究者 微量の人工血液で成功

の誘電率(電気をためる度合い)が異なることに着目。人工血液に特定の周波数の電気を流し、がん化した異常な白血球だけを生きのまま電極に吸着させることに成功した。使った人工血液は0・001ミリリットルとごく微量だったという。

現在、実際の血液の中から異常な白血球を分別するため電気の周波数の特定を進めている。5年以内に白血病の確定診断を可能にするシステムの開発を目指す。学校や職場での定期検診に導入すれば白血病の超早期診断が容易になるといふ。

山川氏は「白血病は早期発見・早期治療が大切。患者の肉体的負担と医療費負担の軽減につなげたい」としている。【松田栄二郎】

白血病の超早期診断に役立つとみられる新技術を北九州市の研究グループが16日、横浜市であった国際シンポジウムで発表した。特定の周波数の電気を使って正常な白血球とがん化したものを分別するもので、ゴマ粒大の人工血液を使った分別に成功した。実際の血液で応用できれば、患者負担も少ないという。

研究グループは、財団法人「フアジシステム研究所」(若松区)所長の山川烈・九州工業大大学院特任教授(脳情報工学)と、今里浩子主任研究員。

山川氏によると、正常な白血球とがん化したものでは、血液細胞